

研究報告

幼児の人間関係を育める親になってもらうための授業

糸田尚史*

名寄市立大学短期大学部児童学科

キーワード：幼児期、人間関係、親子遊び、模擬授業

1. はじめに

名寄市立大学・名寄市立大学短期大学部では地域貢献の一つとして「大学授業体験」（高大連携）事業を実施している。これは定住自立圏域内にある高等学校の初年次生（一年生）に対する進路選択の支援を目的としたもので、保健福祉学部（四年制）の3学科（X学科・Y学科・Z学科）と短期大学部（二年制）の1学科（児童学科）の計4学科に分かれて模擬授業などを行うという地域における高等学校と大学との連携事業である。

模擬授業は原則的に一学年全員が参加する。このため、大学が主催するオープン・キャンパスなどのイベントとは異なり、必ずしもモチベーションの高い生徒ばかりとは限らない。また、青年期という微妙な時期にある高校生すべてに満足してもらうのは容易なことではない。模擬授業の後に実施されるアンケートでは参加した生徒たちから「大変ためになった」「ためになった」「特にためになったことはない」の3段階で評価が行われるが、その評価も厳しくなりがちである。

こうした現状もあるが、短期大学部児童学科で行われる模擬授業は、いずれ「親」になるであろう高校生たちに「幼児の人間関係を育める親になってもらうための授業」を体験してもらえ、好機ともなっている。受講者のうち、保育者をめざして幼稚園教諭・保育士養成系の大学や短期大学に進学する生徒は一部であるので、それ以外の高校生たちにとっては将来、子どもを持ったときに役立つ、より貴重な授業となることが期待される。

2. 方法

児童学科の模擬授業において、短期大学部側としては2年間の比較研究もできるように、2013年度と2014年度を「幼児の発達を促す親子遊び方教室の実践方法」という同一のテーマとし、この2年間は「大学体験授業」事業の模擬授業を筆者が担当し、模擬「親子遊び教室」のトレーナーの役割を演じた。教室は、床が絨毯敷きで、広いけれどもほとんど何も物がないという場所を選び、2013年度はソーシャルワーク実習室、2014年度は地域ケア実習室を使用した。模擬授業では、幼児の人間関係を育むのに有効であると考えられる集団的親子遊びのプログラムである「握手でこんにちは」「手を繋いでランニング」「手を繋ごうの歌」「大きな輪・小さな輪」「絵本の読み聞かせ」「親子のふれあい遊び」「新聞バルーン」「新聞紙ふぶき」「手遊び歌」「お帰りの歌」などを用いて、高校生は二人一組（身体接触が多くなるため同性どうし）で疑似親子を演じてもらった。授業終了後は、高等学校進路指導部作成によるアンケートを参加者全員に記入してもらい、模擬授業における学習効果・教育効果を測定した。

*責任著者

住所 〒096-8641 北海道名寄市西4条北8丁目1番地

E-mail: itochan@nayoro.ac.jp

3. 授業内容

はじめに、子どもの精神発達をアセスメントできる心理検査には WPPSI 知能検査や新版K式発達検査 2001 など、丸の大きさの比較、量の多寡の比較、線分の長さの比較、重さの比較といった試問の入っている知能・発達検査や、協調運動（共応動作）の発達をみる随意運動発達検査などがあることを説明する〔写真 1〕。そして、子どもの発達を促すには、定型発達の幼児も、発達症の幼児も、グレーゾーンの幼児も、できるだけ地域にある「親子遊び教室」のような社会資源に親子で参加することが有効



〔写真 1〕子どもの概念発達等について考える講義

であることも伝える。幼児においては他者と一緒の親子遊びを通して人間関係が育まれ、親子や集団での遊びからも概念形成や言葉、オノマトペ（擬音語・擬声語・擬態語）、随意運動など、認知や行動の学習をしていくことを解説する。

次に、受講生たちには、指導者（筆者）のもとで、親や子の役割を意識しながら、集団的な親子遊びを体験してもらう②。

（1）握手でこんにちは

幼児のなかには、定型発達児だけでなく、発達症（発達障害）の子どももいる。自閉スペクトラム症（ASD）の子どもには、感覚過敏、触覚防衛、視線を合わせないなどの症状があるため、相手の目を見て、手と手をふれあわせて握手することも対人関係のトレーニングになることを体験してもらう。同じ人と続けて握手しないようにしながら次々に違う人と握手するというルールを学ぶ。いろいろな人と出会う人間関係の楽しさを知る。

（2）手を繋いでのランニング

「握手でこんにちは」でランダムにシャッフルされたならば、「輪～になれ」というトレーナーによる繰り返しの掛け声で、隣どうし手を繋ぎ、会場の中に複数の人間による大きな丸い円を作ってもらう。トレーナーは、ある一か所から 2 人ずつペアになるように区切っていく、1 人が親役、もう 1 人が子役を演じる。トレーナーは、円の真ん中で掛け声をかけ、親役も子役も手をつなぎながら「ジョギング」「イチニイチニで歩く」「しゃがみこんだり、ジャンプしたり」「抜き足・差し足・忍び足」「スキップからジャンプ」などにより大きな輪のまま回る。みんながやっているのを見、それに合わせようと模倣、連繋することで子どもの運動発達や情緒・社会性の発達が促進される。勝手に走り回ろうとする注意欠如・多動症（AD/HD）のような子どもたちに対しては自己の行動を社会的にコントロールするという指導・訓練がなされることになる。

（3）手を繋ごうの歌

「親子遊び方教室」のはじまりの歌として、全員で大きな丸い円を作り、中川李枝子作詞・諸井誠作曲による「手を繋ごう、みんなで手を繋ごう、ほうらほうら、大きなお鍋ができました。丸い豆がポンポンポン、お鍋の中ではねました」を歌う。「大きな」「丸い」などの概念を視覚的に見てもらい、跳ねるときのオノマトペはポンポンポンであることを知る。手を繋いで振りながら歌うのは協調運動である。こどもの歌は言語発達、音楽性の発達を促す。

(4) 大きな輪・小さな輪

みんなで手を繋ぐと視覚的に「大きな輪」ができることを知る。輪の真ん中でトレーナーは、「小さく」「大きく」などの声掛けを繰り返しながらその動作をしてモデルとなる〔写真2〕。発達期の子どもは、一気に行うことは簡単でも、徐々に行うというコントロールが難しいため、その練習ともなる。「大きく」や「小さく」という言葉に、自己の身体や姿勢の状態、みんなで作った輪の状態がどのように対応し、変化するかを体験しながら学ぶ。



〔写真2〕 大小概念等を視覚・運動体験から学ぶ演習

(5) 絵本の読み聞かせ

絵本は子どもだましのものではなく、幼児期で卒業するものでもないことを再確認してもらう〔写真3〕。優れた絵本は大人をも感動させる。人間関係にかかわる内容の絵本を人が人に読み聞かせる行為も対人関係性のなかで成立するものである。そこでの相互作用がお互いの気持ちや行動を調整し合う。読み手は文字を読んでいる時に文字が「図」で絵は「地」となっており、読み手が絵を見ている時には絵が「図」で文字は「地」とならざるを得ないが、聞き手は目で絵を見ながら耳から言葉を共時的に聞くことができる。読み聞かせをされる側には異感性間の共応がはかられ、言語発達、情緒・社会性の発達が促される。



〔写真3〕 人間関係力等の発達を促す絵本の読み聞かせ

(6) 親子のふれあい遊び

親子役で向かい合って手を繋ぎ、「縄跳び歌」を使って腕を動かす。「縄跳び歌」は、実際に縄跳びがなくても、両手を繋ぎ合えば、それに合わせて親子で遊ぶことができ、アタッチメントや随意運動の発達などはかられる。「にほんばしこちょこちょ」「ぱんぱんパン屋さん」「胡瓜の漬物」などの遊びも同様である。自分で自分をくすぐってもくすぐったくないのに、人からくすぐられたり、くすぐられそうになるとくすぐったいのは脳（社会脳）の働きと考えられている³⁾。「にほんばしこちょこちょ」では「階段のぼってコチョコチョ」のところでくすぐり、「ぱんぱんパン屋さん」では「チョコ・パン」のところでくすぐり、「胡瓜の漬物」では、親役が子役を胡瓜に見立てて洗ったり、塩を振りかけたり、すり込んだり、重しをかけたり、食べる動作などでくすぐる。情動やアタッチメントは社会関係のなかで発達していく。

(7) 新聞バルーン

新聞を貼り合わせて作られた大きな新聞シートをみんなで「新聞バルーン」として使用する〔写真4〕。トレーナーは、はじめ新聞シートを折り畳んだ状態で持ち出してきて、何組かの親子役の協力を得て展開していくたびに、見た目が「大きく」なっていくことを言葉で伝えていく。新聞が一面に広げられたならば、新聞シートの周りをみんなで持ち、トレーナーの掛け声に合わせて、「上」や「下」に動かす。子どもは「なか」、大人は「そと」などの指示に合わせて行動し、新聞シートの中は「暗い」、そこから出ると「明るい」ことを

体験する。上下概念や内と外の概念、子ども－大人や明るい－暗い概念、破れやすい新聞という素材に対する程よい力入れ具合や他者との協調などを学んでいく。みんなで協力・調整し合い、新聞を海や波に見立て、ぴったりのオノマトペとともに一方から揺らし、その動きや微かな音を楽しむことで、注視・注聴の練習にもなる。

(8) 新聞紙ふぶき

新聞は破りやすい素材でもある。みんなで新聞を破り、細かくしていく。トレーナーはあらかじめ作成しておいた新聞紙片を大量に追加し、適切なオノマトペとともに、紙片を親子で掛け合う。新聞紙を破る動作では目と手の協調を体験する。紙片を掛け合うことから複数の他者とのかわりを体験する。

(9) 手遊び歌

普通、独りだけ「手遊び歌」で遊ぶことはしない。「手遊び歌」は他者との関係性のなかで行われるものである。しっかりと相手を見て、その動作を見、模倣しながら、耳で聞いた言葉や音楽も習得していく。「野菜の歌」などでは、「もやしはモジャモジャ」など洒落た言葉遊びに加え、「モジャモジャ」の言葉でお互いにくすぐり合う対人関係の楽しさを味わう。

(10) お帰りの歌

「親子遊び方教室」の終わりの歌として、全員で手を繋いで大きな輪を作り、天野蝶作詞・一宮道子作曲による「今日も楽しくすみました、仲良しこよしで帰りましょう、先生さようなら、またまた明日、折り紙積木も片づけて、お帰りお支度できました、みなさんさようなら、またまたあした、グッドバイ」を歌う。手を振ったり、回ったり、グッドバイの動作をしながら歌うことで協調運動発達を促す。



【写真4】随意的協調運動や社会的協働性等を育む演習

4. 実施結果

こうした模擬授業への工夫を行うことで、どのような結果が得られたか。進路指導部が事後に実施したアンケート調査では、2013年度（1年目）の児童学科の模擬授業は、「大変ためになった」が87%、「ためになった」が13%、「特にためになったことはない」が0%となった〔表1〕。2014年度（2年目）の児童学科の模擬授業でも、「大変ためになった」が84%、「ためになった」が16%、「特にためになったことはない」が0%となり〔表2〕、他学科に比して高めの学習効果・教育効果が認められた。これにより、「幼児の人間関係を育める親になってもらうための授業」は、高校生にとっても有用であり、その効果が実証されたといえよう。

〔表1〕2013（平成25）年度 高等学校進路指導部アンケート調査結果 n=145 単位は人、（ ）内は%

	X学科	Y学科	Z学科	児童学科	合計
大変ためになった	23 (43%)	18 (51%)	14 (52%)	26 (87%)	81 (56%)
ためになった	30 (57%)	16 (46%)	13 (48%)	4 (13%)	63 (43%)
特にためになったことはない	0 (0%)	1 (3%)	0 (0%)	0 (0%)	1 (1%)

2013 年度の児童学科模擬授業 「幼児の発達を促す親子遊び方教室の実践方法」を受講しての感想（自由記述）

(1) 大変ためになった：児童について、学ぶことはもうほとんどないと思っていました。けれど、話を聞いてみたり、自分たちが体験してみたりして、新しい考え方を持つことができました。この機会を得たことで、児童学科だけでなく大学全体への見方を改めることもできました。本当に楽しい模擬授業でした。(2) 大変ためになった：ためになることもたくさん教えてくれたので、とてもよかったです。(3) 大変ためになった：親子遊びについて自分で体験しながら学べたので、とてもためになった。おもしろかったです。(4) 大変ためになった：親子遊びが始まった時は、恥ずかしかったのですが、途中からは、とてもはしゃぐことができた。年少のいとこがいるので、今度会う機会があったら、その子にやってみたいと思いました。(5) 大変ためになった：今後この仕事に就くかどうかはわからないが、一つの可能性として良い経験ができたので良かった。(6) 大変ためになった：おもしろかったです。大きい声でもり上がれました。(7) 大変ためになった：おもしろいコトがたくさんだった！ お手々遊びとか新聞紙とか、みんなでやったから楽しかった。大学のイメージはちょっと、重いカンジだったけど、少し楽しそうかなって思った。(8) 大変ためになった：将来 子どもに関わる機会が必ずあるので、いい勉強になったなと思ったからです。(9) 大変ためになった：幼児になった気分がとても楽しめました。どうやったら子どもが楽しめるのかなど たくさんのことを学べました。(10) 大変ためになった：幼児になった気分が楽しかったです。(11) 大変ためになった：子どもの発達方法がまなべてよかったです。自分で体験してみることで子どもの時の感情にもどれた気がします。たのしかったです！(12) 大変ためになった：手遊び歌とか面白いのがたくさんあったから。真似をすることは小さい子にとってとても大切だとわかったから。(13) 大変ためになった：中学生の時に職業体験で保育所に行くことになり、行く前は子どもたちと遊べばいいと思っていたけど 行ってみたら 全然違って 普通に遊ぶことも大変で、どうしたらいいのかわからなくなっていたけど 今回 子どものようにとても楽しめて とてもためになりました。(14) 大変ためになった：ただ遊んでいるだけでなく、意味をもってやっていることがわかった。楽しみながら学んでいることがわかった。すごく楽しい時間でした!!! (15) 大変ためになった：とにかく全部楽しかったです。あっという間に時間がたってしまいました。(16) 大変ためになった：楽しく遊びながら学ぶことで いつのまにか覚えていった。体をつかって体験して、とても楽しかったです。(17) 大変ためになった：保育士は遊びの中で様々な概念を教えている。とても楽しかった。(18) 大変ためになった：最初は、どんなことやるのかなーと思っていましたが、話を聞いたり、みんなで遊んだり、本を読んでもらったりしてすごく楽しくて、盛り上がりました。今回の体験で将来の夢を見つめ直すことができました。(19) 大変ためになった：色々遊びながら、これは何のためにやるんだよ。とか、教えてくれたから。遊び すごくたのしかった。新聞が1番たのしかった。(20) 大変ためになった：子ども達が普段考えていることや気分などが体験することによってよりわかった。実際にあそんでみて、新聞紙のあそびや、体をうごかすあそび、手あそびなどとても幼稚なあそびに思われがちだけど心の底から楽しめた。糸田先生がとてもおもしろく、より楽しく体験することができた！(21) 大変ためになった：自分で体験してみて、とても楽しかった。保育所の先生方は、子どもと遊んでいるだけではなく、発達するために考えて遊んでいるのだなと思った。(22) 大変ためになった：名大さんに私の進路希望学科がなかったため、一番気になった児童学科を選択しました。模擬講義を受け 先生が面白く、幼児になったように楽しむことができました。私には妹が2人いるので、幼児とふれあう機会が多かったため 子供が好きです。今回の講義を受け、保育士など、子供とふれ合う仕事も、いいなと思いました。楽しい講義をありがとうございました。(23) 大変ためになった：保育の仕事は、子どもたちを成長させ、楽しませるということだと思っていたけれど、子どもたちだけでなく、自分たちも楽しむことができる仕事なのだと思います。子どもたちだけでなく、わたしたちも日々のストレスを発散でき、思いっきり楽しめたのでとてもよかったです。とてもためになる講義をありがとうございました。(24) 大変ためになった：いろいろな遊びが出来て楽しかった。子どもの発達のためにいろいろ工夫している事を初めて知った。短い時間だったけど学ぶ事ができた。保育士になりたいという気持ちがあったので、もっと勉強して、なれるようにがんばりたいとあらためて思った。今日はありがとうございました。(25) 大変ためになった：全身を使い、色々なことを体験しながら楽しく講義を受けさせていただきました。高校とはまた違った雰囲気、幼児さんならどう思うのかなど、とても考えやすかったです。ありがとうございました。(26) 大変ためになった：小さい子が好きだから今後つかえる遊び方を教えてもらってためになったし、自分でもすごく楽しむことができました。特にみんなで手をつないで遊んだり、新聞紙をちぎって周りの人たちとかけ合ったりするのが楽しかったです。幼児の子

たちと遊ぶときは生かしたいと思ったし、保育者になるのもいいなあと思いました。(27) ためになった：幼児に対してどう接するかや遊びの中にどんな目的があるかを良く知ることができました。幼児と一緒に遊ぶ時は自分も一緒に子供の気持ちになることや読み聞かせのときに言葉をなげかけたりするのは大切だなと思った。(28) ためになった：保育に関わる仕事はすごく重大なのだなと思った。子どもの気持ちになって、いろいろなふれあいができてすごく楽しかった。(29) ためになった：保育士について考えることができた。ただ普通に遊んでいることが、子どもの発達などに深くかかわってくるのだなと思った。意外と体力をつかったので大変だなって思った。(30) ためになった：幼児がどのように感じているかや、幼児の行動原理についてが、分かった。結構ハードでつかれた。体験することがないことをたくさんやったので楽しかったし、ためになった。

[表 2] 2014 (平成 26) 年度 高等学校進路指導部アンケート調査結果 n=144 単位は人、()内は%

	X学科	Y学科	Z学科	児童学科	合計
大変ためになった	10 (30%)	23 (43%)	5 (25%)	31 (84%)	69 (48%)
ためになった	22 (67%)	30 (55%)	14 (70%)	6 (16%)	72 (50%)
特にためになったことはない	1 (3%)	1 (2%)	1 (5%)	0 (0%)	3 (2%)

2014 年度の児童学科 模擬授業「幼児の発達を促す親子遊び方教室の実践方法」を受講しての感想 (自由記述)

(1) 大変ためになった：糸田さんがおもしろかった。子ども 接し方 について学ぶことができた。親の気持ちと子どもの気持ちの違いについても深く学ぶことができた。(2) 大変ためになった：自分の夢が保育士、幼稚園の先生なので、それに関することをもっと深く知ることができました。もっと児童について知りたいと思ったし、遊びの中にも幼児に対する気づきが大切だと感じました。将来に対して、深く考えることができました。保育者の視点で校内外を歩いてみると、ここ 危ないのかな これ 普通は気づかないなという所が多く感じられました。(3) 大変ためになった：今回、自分が親子の立場になって参加してみて、客観的なとらえ方をしてみると、1つ1つの動きなどが別のなにかにつながっていて、とても不思議な気持ちでした。今の年齢になっては楽しさがわからない遊びも、小さい子にとっては楽しく遊べる遊びなのだということがわかりました。(4) 大変ためになった：自分が考えていたよりずっと、体力をつかったし、親、保育士になるということは大変で、考えることもたくさんあるのだな、と思いました。(5) 大変ためになった：大学体験授業という事で、かたくるしいのを想像していましたが、体をうごかす事が出来たりと、とても楽しくすごせました。(6) 大変ためになった：児童学科を選んだのは、子どもが好きで、興味があったから選んだけど、講義に参加して、子供を見る目が変わりました。少しの段差があぶななったり、小さなことが大きなことにつながるのだと思いました。講義に参加して、とてもよかったです。自分の将来の参考にします。(7) 大変ためになった：先生が面白い人でびっくりした。(8) 大変ためになった：子どもの気持ちや、子どもの目線のことも知ることができた。父親も母親も子供と接することが大切。(9) 大変ためになった：親子でできるあそびがたのしかった。子どもの気持ちになって遊んだりして 子どもの成長のことを考えながら 親が接する児童の深さを知った。(10) 大変ためになった：子どもの目線になって考えることが大切ということがよくわかった。楽しかった。(11) 大変ためになった：とってもおもしろい先生で、皆と一緒に楽しめたし、保育士などは「子供にケガをさせないようにたのしく遊ぶ」ことだとばかり思っていたけれど、少しだけ児童のことについてかじってみたら、とても深かった！(12) 大変ためになった：とても楽しかった!! 子供に戻った気がしました。新聞紙の紙ふぶきと、親子あそび、とても楽しかった！(13) 大変ためになった：幼児と親の気持ちになれて 楽しい遊びでも目的があると知れた。とても楽しかった。(14) 大変ためになった：知らなかったことが学べたから。(15) 大変ためになった：楽しかった！ 子どもの気持ちを考えるのって大変！だとわかった。一緒に楽しそうに遊ぶことで 子どもと一緒に楽しんでもくれるのだなと思った。(16) 大変ためになった：模擬授業を通して、周りに関わること、遊びながら他と触れ合うことの大切さが わかりました。(17) 大変ためになった：今後、子どもをもつようになったとき、役立つこと、たくさん教えてくれたから。(18) 大変ためになった：保育士は色々考えて行動しているのだなと思いました。手遊びをし

たり、新聞紙を使って遊んだり、絵本の読み聞かせをしたり、色々な遊びをしました。1つ1つの遊びは子どもたちの発達や成長を考えているものなのだなと思いました。(19) 大変ためになった：親子（多人数）で遊ぶことによって子どもが成長していくものだと思えてきた。(20) 大変ためになった：子どもの気持ちになり、楽しめた。(21) 大変ためになった：体をつかっていろんなことを学べた。楽しかったし、どうするべきかというのがわかった。(22) 大変ためになった：児童の気持ちになれた！とても楽しかった。遊びながら人と触れ合って成長していくのだなと思った。(23) 大変ためになった：子どもを楽しませながらルールなどを学んでいく方法を知れたし、自分たちもとても楽しくできて良かったです。(24) 大変ためになった：子どもの目線に立って考えたりするのがすごくためになりました。将来、保育関係の仕事についてとき、子供ができたときに今日のことをいかしたいと思いました。(25) 大変ためになった：将来、何かがおきなければ保育関係に進もうと思っているので、とてもためになりました。たくさん動いて疲れたけど、いい運動になったと思います。ほんとうに小さい子と遊ぶと気に入ると何回も要求してくると思うので体力が必要だなと思いました。(26) 大変ためになった：たのしかった。(27) 大変ためになった：子供や育てる親の気持ちがよくわかった。どのようにして子供を成長させていくかたくさん知れたと思う。(28) 大変ためになった：とても楽しかったし、子どもと親の関わりや接し方など、いろんなことが学べた。(29) 大変ためになった：すごく楽しかった！すごくたくさん身体をうごかして、体力をつかって つかれた。子どもの目線や親からの目線になって講義を体験できて、とても勉強になった。良い体験ができた。今後に生かしたいと思った。(30) 大変ためになった：自分が幼児のときにした遊びを久々にやってみて、楽しかった。「アフォーダンス」が印象的だった。(31) 大変ためになった：子どもには手・足を動かしながら、遊ぶのが適していると知った。(32) ためになった：遊びながら覚えていくので、色々覚えることができた。楽しくできた。想像とは違った。(33) ためになった：子育てはすごく大事。考え方が変わりました。将来少しでも役立てられるとうれしいです。(34) ためになった：イメージと違って自分の学びたいことと若干ズレてたけど楽しかった。子どもとの接し方など少しわかった気がする。(35) ためになった：子供の頃の遊びが子供の発育とかにかかわっていると思った。(36) ためになった：とても楽しかった。汗かいた。(37) ためになった：体で体感して わかりやすく、たのしかった。

4. 考察

地元高校生を対象に、高校大学連携事業において、幼児期の地域子育て支援事業（ここでは「親子遊び教室」）を再現してもらうスタイルの模擬授業を行い、親子の役割を意識してもらうことに注力した。事後に実施したアンケート調査で、児童学科では2年連続で、「ためになった」が2割未満、「大変ためになった」が8割以上となり、学習効果・教育効果が認められた。しかし、これは高校生の男女がこれまでこうした子育てにかかわる授業をほとんど受けた経験がなかったがための結果であるともいえる。そうであるならば、高校生を対象としたこの種の模擬授業は、やがて幼児の人間関係を育める親になってもらうための一つの効果的な教授方法ともなる。

保育や育児にかかわる家庭科での授業やインターンシップ体験などはすでに中学校や高校でも始まっているが、いずれは親となっていくであろう青年期の子どもたちに対する今回の方式での模擬授業（親や子の役割を意識しながらも指導者のもとで幼児期の集団的な親子遊びを体験する）のようなプログラムは、これからの日本社会ではますます必要なことであり、こうした方法をもっと普及させるべきと考える。同様の取り組みの広がりを期待したい。ご協力をいただいた地域の高校の皆様に深く感謝し、お礼申し上げます。

※本研究報告の一部は2014年11月8日に開催された現代行動科学会第31回大会において発表した。

注

- 1) ここで最も参考になった文献は、今井むつみと針生悦子（2014）『言葉をおぼえるしくみ』（ちくま書房）であった。
- 2) さらに詳しくは、糸田尚史（2010）「親子集団遊び支援のロールプレイング：子ども家庭福祉サービスの授業実践研究」（岩手フィールドワークモノグラフ第12号；pp.19-37；岩手県立大学・岩手フィールドワーク研究会）を参照されたい。
- 3) この点については、スタッフォードとウェッブ（夏目大訳；2005）「自分で自分をくすぐってもくすぐったくないのはなぜか」『Mind Hacks：実験で知る脳と心のシステム』（オライリー・ジャパン / オーム社；pp.243-246）に詳しい。